

『平家物語』 国語教育の一側面

— 諸本のことなど —

武田 昌 憲

はじめに

中学・高校の国語の教科書で『平家物語』を取り上げないものはほとんどない状況になっている。古典教育の促進は、新学習指導要領（平成二十年）の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の影響が大きい。これに「生きる力」を育成することが加わる。

大学教育においても、これらの影響も考え、特に将来「国語」の教員免許を取得して教壇に立とうという学生を見ると、『平家物語』の講義・講読・演習、または模擬授業等でははずせない科目となっている。そこで、『平家物語』を教材で扱うことについての印象をささやかではあるが述べさせていただきたい。

1、

当初は「生きる力」の体現的な作品として文字通りの生き抜く力の場面・難局を切り抜ける場面、生きることに意味を見出すような教育を古典作品の中で見出すとするならば、軍記物語、中でも『平家物語』はうってつけの教材の一つとなるだろうと期待していた。

しかし『平家物語』は戦場の美化に努めすぎる。よく指摘されているように戦いの場面で血が出ないし、酷い場面も描写が少なく、戦争の本当の残酷さがいまい描けないのが現在の実情である。「滅びの美学」を追求しようとすればそうなるだろう。生徒からすれば日常のテレビゲームの感覚に過ぎないのは、不安を感じる。これは大学・短期大学の学生を教える場合でも同じ感覚にとらわれる。

たとえば「木曾最期」で巴御前が最後の戦を木曾義仲に見せようとする箇所は、女性が男性と互角以上に戦う貴重な場面として必ず高校の教科書が載せるのであるが、以下に引用する。

五騎が内まで巴はうたれざりけり。木曾殿「おのれは、とうとう、女なれば、いづちへもゆけ。我は打死せんと思ふなり。もし人手にかからずば自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど、いはれん事もしかるべからず」と宣ひけれども、なほおちもゆかざりけるが、あまりにはれ奉つて、「あつぱれ、よかろうかたきがな。最後のいくさしてみせ奉らん」とて、ひかへたるところに、武蔵国にきこえたる大ぢから、恩田の八郎師重、卅騎ばかりでいできたり。巴その中へかけ入り、恩田の八郎におしならべて、むずととつてひきおとし、わがのつたる鞍の前輪におしつけて、ちつともはたらかさず、頸ねじきつてすててんげり。その後物具ぬぎすて、東国の方へ落ちぞゆく。

手塚の太郎打死す。手塚の別当落ちにけり。(注1)

木曾の「おのれは、とうとう、女なれば、いづちへもゆけ。」も義仲の気持ち(本心)を探る上でも興味深い設定であるが、巴は大変美しく掲出文の前には「巴はいろしろく髪長く、容顔まことにすぐれたり」と描写されているぐらいで、そのうえ「ありがたき強弓精兵、馬の上、かちだち、打物もつては鬼にも神にもあはうどいふ一人当千の兵者なり」というぐらい強い。彼女の唯一の戦闘場面が前掲したものであるが、その中で、苦も無く「頸ねじきつてすてんげり」という描写は、ものすごい迫力のある場面であるが、人形の首を引き抜いたのではない。ねじ切り頸の描写は例えば甲斐武田氏の軍記の一つ『甲陽軍鑑』品第四十七に「旗本にては諏訪越中が長柄を二本とりて、人を十五六人た、きころばし、其後よき侍を一人頸をねじきりし糸のごとくに筋の見えたる頸をもちきたる」(注2)のように、視覚的には大変酷いものである。さすがの武田武士もぎよっと

したのではなからうか。美によって隠される残酷さ、亡びの美しさが死を誘うのでは困るが、逆に、死への尊厳を自覚させる必要があるだろう。

「扇的」のシーンは、的を射宛てる前後の与一の心理と気候の変化が重なる情景描写と相まって、扇の最期の美しさが、正に扇の破断された最後の様子が夕日に照らされて美しく描かれているのであるが、まさに「滅びの美」としては最良・最高の場面でもある(注3)。

是が人間になると無常観は誘えても、そこに生きる力よりも敗者の喪失感の方が前面に出てきそうでもある。「木曾の最期」にせよ「敦盛最期」にせよ、人の最期を描く描写ほど、しかも非業の最期を遂げなければならぬ戦闘場面では、なおさら、非戦論の立場で教育する必要があるだろう。日本の軍記作品の多くが敗者の立場を中心に描くものが多い、いわば「敗者の文学」や「諸行無常」「滅び」をテーマとすることを考えると、学習指導要領にもある「生きる力」との背反性にも十分注意しなければならぬ

い。『平家物語』の場合、「生きる力」と「滅びの美」をどう矛盾なく学ばせることができるかが教員の力量を問われる一要素になりうる。詰まるところは教える側の教員の力量次第ということになるだろう。

2、諸本の活用

例えば『平家物語』の「祇王」でもよく説明するのであるが、平清盛が白拍子の仏御前を見初めた場面、

「入道相国舞にめで給ひて、仏に心をつつされけり。仏御前「こはさればなに事さぶらふぞや。…(中略)」と申しければ、入道「すべてその儀あるまじ。ただし祇王があるをはばかりか。その儀ならば祇王をこそいださめ」とぞ宣ひける。」

という場面があるが、仏御前が「こはさればなに事さぶらふぞや。」と驚いた様子がわからない。ここは百二十句本も同じで、水原一氏の頭注も「広本系はかなり露骨に、清盛が仏を闇に連れこむ様子を記す。そうした情景を略化した婉曲な表現なのである」(注4)という説明通り、広本系(読み本系)の『源平盛

「衰記」などは涎をとろとろ流して仏の舞を見て、途中から抱き付いてゆく清盛像が描かれている。これで仏が驚く様子がよくわかるのである。

教材で言えば、「扇的」の場面で、「弓流し」に続けて描かれる、「とし五十ばかりなる男」の射殺については今井正之助氏の興味深い指摘と考察がある（注5）。諸本の違いを指摘して、より面白い、興味ある世界が展開されるのである。氏は「とし五十ばかりなる男」の存在意義を扇を立てた位置での舞の重要性も加えて指摘され、大変興味を持った。氏は、また

「『覚一本の問題は覚一本に即して考察すべきであるが、それが困難な箇所は、同じ状況設定を行っている、他の語り本系の表現を参照するのが順当であろう。中学生に対しても、事典などによる語釈（これも厳密に言えば外部の知識の持ち込み）の延長として、『平家物語』にはたくさんの種類があり、ここをこのように描いている本もある」と説明し、考えさせることは可能であり、意味のあることではなからうか。」

と教材上での有効性を指摘された。これは諸本比較の上で最も分かり易い諸本研究法であり、又古典教育の諸本の違いを認識させるうえでも（現代国語とは異なる）重要な指摘ではないかと思われる。ただ、問題は教員の側がこれ（諸本の違い）を受け入れるかである。まず、教員側が「面白い」と興味を示してくれなければ教育効果も半減してしまうだろう。教員が教壇に立つ前に、諸本研究とその理解を得ているかは教育現場での生徒に対する『教える力』を左右するかもしれない。

3、教材としての『平家物語』

しかし、今日の教科書では覚一本系統の語り本を使用するのがほとんどで、『源平盛衰記』等のいわゆる読み本系統を採用する者は皆無である。読み本系でなく、今井氏も「他の語り本系の表現を参照するのが順当であろう。」と指摘されているように、語り系の方が、確かに、琵琶法師によって語られてきたことから、聞きやすく、また、本文の「音読」「群読」にも適しているだろう。これと相まって冒頭部の「祇

園精舎の鐘の声」を含めると、暗唱・ことわざ・慣用句・故事成語・熟語等の教育には事欠かない教材を提供してくれている。豊かな伝統文化が凝縮されているのである。

要は、教える対象の生徒をどう見るか。生徒は画一的ではない。個性的であるからこそ、一つにまとめていくのは教員の努力と苦労が必要であるだろう。

また、平家の語りについては、DVDなどでの映像教育が施されていればよい方で、実際の授業では琵琶法師と「平曲」の存在の指摘でおしまい。中学高校も同じ。大学も同様な状態が多いだろう。例えば兵藤裕己氏の「モノ語りとは〈異界〉のざわめきに声を与え、伝えることである」という指摘(注6)まで漕ぎ着ければとも思う。作品を読む(含む音読)・書く・聞く・見る・そして話す(話し合う)機会を与えてくれるすぐれた教材として今後も『平家物語』は古典の最高峰として君臨するだろう。

教育における語りとは、実は、私たち先祖の魂を呼び覚ますものであり、それは私たち子孫が内包している伝統意識を目覚めさせる装置でもある。スリ

リングなものでもあることを伝えられれば教材としても豊かさが加わるかもしれない。

4、現場の『平家物語』

一方で教育現場では『平家物語』は一単元に過ぎない。これだけが教材ではないので、研究者のような深みにはまる余裕はない。実際に現場で奮闘努力されている教員の声を見てみる。たとえば教育科学『国語教育』では、中学校における古典指導の開発として蔭山江梨子氏が「日本文化・思考の型を楽しく『平家物語』「扇の的」を例に」(注7)を展開されている。氏は小・中・高までの系統的な新古典システムの構築を提唱されているのだがその中で中学校における古典指導開発のポイントとして、

- 1、「内容理解としての音読・暗唱」を理解する。
- 2、「作品のテーマ・メッセージ」を教えるから。
- 3、現代語訳を積極的に紹介する。
- 4、語られていない「背景・価値観」を教える。
- 5、小説や随筆、記録等の「習得・活用の観点」を応用する。

6、楽しくわかる「段階的な学習過程」を構成する。をあげられているが、特に「4語られていない」「背景・価値観」を教える。」に諸本の異文を指摘してみるのも効果的かもしれない。あくまでも「詳しく過ぎずに楽しく指導する（クイズ形式他）」（同誌76p）ことを心掛けてのことであるが。

また続けて「扇的的」―死への過程から時代と生を―では、

1、『平家物語』のテーマと教材の生かし方

①死と向き合う中で発揮される人間性

②時代の価値観に翻弄される人間の姿

2、「扇的的」から古典学修、他学修への展開

①状況をシンプルに理解させる（表現の事実を楽しく）。

②場面構成の特色を読み取らせる（教師主導が基礎・基本）

③中心人物の設定と変化・エピソードを理解させる。

④対比的人物の設定と役割、効果を理解させる。

⑤語り・描写の方法と効果を読み取らせる（モ

デルを示す）。

⑥作品のテーマ・メッセージを解釈させる（省略）とある。2の④⑤あたりでも「年五十ばかりなる男」

の諸本の「補足」をしてもよいかもしれない。

同誌には続けて笠井正信氏の「『平家物語』を楽しむ」読む 単純明快に全体像をつかみ、あらずじをとらえるところからの古典入門」（注8）では、授業で『平家物語』に親しみを持ち、平家を含む古典作品を楽しむに生徒が接することができる工夫が織り込まれている。

正直なところ、諸本の紹介は全くない。なくても、これはこれで素晴らしい、そして「楽しい」授業の工夫がされているのではないのかと思われる。生徒がどれだけ古典作品に興味を持ってくれるのかは、教員の資質もさることながら、生徒の個性も大きく左右されるだろう。誤解を恐れずに言えば、強制的な群読も問題なしともいえない。

第一に古典の音読、旧仮名遣い等は英語の音読とは異なり、日常用いない、その場限りのものになりかねないところが苦しいところではあるが、これも

日本人の持つ教養の一つと理解するべきであるだろう。

お二人の例しか挙げられなかったが、古典教育の共通のキーワードの一つは「楽しく」である。死生観から命の大切さや生き甲斐を見出せるようになればとも思っている。『平家物語』を面白く教えたい。しかし、専門家のような教授法だと現場で教師も生徒も消化不良になる恐れもある。限られた時間の中で最大の古典教育は何かを考える時、最大の思いは、やはり楽しく読む・学ぶことである。

終わりに

「扇的」は人気のある章段で分かり易い。しかし詰め込みすぎると「弓流し」よろしく

「御定ぞ、つかまつれ」といひければ、今度は中差とつてうちくはせ、よっぴいてしやくびの骨をひやうふつと射て、ふなそこへさかさまに射倒す」

の後の源平の武将たちの反応宜しく、教員だけが自己満足し、「生徒の方には音もせず」になりかねないのである。

注

1、引用文は『平家物語 覚一本 全』大津雄一・平藤幸 編 平成二十五年 武蔵野書院による。以下同 ただし一部カタカナをひらがなにしたところがある。

2、改訂 甲陽軍鑑（下）昭和四十年、新人物往來社

3、拙論「那須与一の「扇的」は、なぜ扇か―古典教育の一面として―」『茨女国文』20、平成二十年

4、新潮日本古典集成『平家物語』水原一校注 昭和五十四年。もともと、（読本系が）最初から辻褄が合うから正しい読みなのか、（語り本系が）読めないから辻褄合わせの説を補足してあとから筋立てたのか不明である。

5、今井正之助「「扇的」考―「とし五十ばかりなる男」の射殺をめぐる―」『日本文学』平成二十六年五月

6、兵藤裕巳『琵琶法師―異界』を語る人々（平成二十一年、岩波新書 この付録について

- るDVDは教材としても使用できる)
- 7、 蔭山江梨子 教育科学『国語教育』733号
平成二十三年二月75p～78p
- 8、 笠井正信 注7 同誌79p～82p